

## □. 分担研究報告

令和元年度 厚生労働科学研究費補助金(認知症政策研究事業)

認知症の人やその家族の視点を重視した認知症高齢者にやさしい薬物療法のための研究  
分担研究報告書

認知症患者への薬物治療が生命予後に及ぼす影響についての検討

研究分担者 水上勝義 筑波大学大学院人間総合科学研究科

### 研究要旨

多剤併用の薬物治療を受けている在宅高齢者の検討から、薬剤による排尿障害には男女差がみられること、排尿障害のタイプによって関連する薬剤が異なること、リスクがある薬剤の併用により排尿障害のリスクが著明に高まることが示唆された。

#### A. 研究目的

高齢者のポリファーマシーによる排尿障害のリスクに薬剤数あるいは種類のいずれが影響するのか、また薬剤と排尿障害のタイプを明らかにすることを目的とした。

#### B. 研究方法

要介護1～5、処方薬5剤以上、在宅医療受療中の65歳以上の高齢者を対象とし、訪問看護ステーションに質問紙調査の回答を依頼した。

(倫理面への配慮)

静岡県立大学研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号 29 - 3)

#### C. 研究結果

対象76名の多くは重度認知症であった。入男性の10剤以上に、溢流性尿失禁で有意傾向を示した。女性の場合、腹圧性尿失禁は、 $\alpha$ アドレナリン受容体拮抗薬、切迫性尿失禁はベンゾジアゼピン(BZ)系薬剤がリス

クであり、機能性尿失禁は、 $\alpha$ 受容体拮抗薬がリスクを低下、コリンエステラーゼ阻害薬はリスクであった。 $\alpha$ 受容体拮抗薬とBZ系薬との併用で、腹圧性および切迫性尿失禁の、 $\alpha$ 受容体拮抗薬とコリンエステラーゼ阻害薬の併用で、腹圧性尿失禁のリスクが著明に高まった。男性は排尿障害のリスクとなる薬剤は認めなかった。

#### D. 考察

薬剤による排尿障害には男女差がみられること、排尿障害のタイプによって関連する薬剤が異なること、リスクのある薬剤の併用によりリスクが著明に高まることなどが示唆された。

#### E. 結論

薬剤性排尿障害に対する対策は男女で異なること、日常臨床で用いられる併用薬剤が排尿障害のリスクを著明に高めることが示された。

F. 健康危険情報  
とくになし。

G. 研究発表

1. 論文発表

宮崎さやか,山田静雄,東野定律,渡邊順子,水上勝義.在宅医療高齢者における排尿障害と処方薬剤の関連.日本老年医学会雑誌 56(3), 301-311, 2019

2. 学会発表

宮崎さやか,松本一彦,山田静雄,水上勝義.在宅医療高齢者における処方薬剤の実態

と排尿障害の関連.第3回日本老年薬学会,名古屋,2019年5月.

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

とくになし。

2. 実用新案登録

とくになし。

3. その他

とくになし。